

研究主題「グローバル人材の育成を目指した言語能力向上を図る指導に関する一考察 －国語科におけるカリキュラム開発と単元学習開発－」

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課
東京都立橘高等学校 教諭 小沢 貴雄

第1 研究のねらい

我々が生きる現代は、国境の壁が低くなり世界規模で優秀な人材が求められている、いわゆるグローバル化の時代である。しかし日本人の若者は内向き志向だという傾向が「高校生の生活意識と留学に関する調査報告書」(平成24年)等でも明らかになっており、子供の意識の変革を図る教育が求められている。国でも高校生や大学生の留学を促進し、世界で活躍できる人材を育成しようとしている。さらに東京都においてもグローバル人材の育成は急務であるとし、「2020年の東京」計画の中の「かわいい子には旅をさせよプロジェクト」による「次世代リーダー育成道場」が本年度から開設された。

現在の子供たちを国際的に通用する人材として育成するためには、あらゆる機会においてグローバル化に対応する教育を実践していく必要がある。そのような人材を育成するために特に重要な力として、「グローバル人材育成推進会議中間まとめ(以下、「中間まとめ」と表記。)(首相官邸、平成23年)等の中では、コミュニケーションを円滑に図るための母語による総合的な言語能力であると述べられている。

そこで本研究では、そのような言語能力を効果的、効率的に高められる中等教育(後期課程)段階における国語科カリキュラムを開発する。さらにそこから抽出した一単元を検証授業として実践することを通し、グローバル人材の育成を目指した言語能力の向上を図る具体策を明らかにすることを目指した。

第2 研究仮説

国語科としてコミュニケーションを円滑に図るための母語による総合的な言語能力の向上を図るカリキュラムを開発するとともに、多様な言語活動を取り上げた単元学習を提案することにより、生徒にグローバル人材として必要な力を身に付けさせることができる。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

まずグローバル人材の概念は「中間まとめ」の中で、「要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力、要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」と整理されている。また求められる能力としては、「国際交流政策懇談会 最終報告書」(文部科学省、平成23年)の中に「日本人としての素養、外国語で論理的にコミュニケーションをとれる能力、異文化を理解する寛容な精神、新しい価値を生み出せる創造力であると考えられる。(中略)まずは国際社会で自らの考えや立脚点を臆することなく主張できる能力が必要」と記されている。

グローバル人材の育成を目指す際、国語科の観点から身に付けさせたい力を整理し、再構成することを本研究の基盤とする必要があると考えた。このような理由から、先ほど挙げた記述等を参考にし、本研究において生徒に身に付けさせたい力である「グローバル人材の育成を目指した言語能力」を整理し、再構成したものが次ページの「表1」である。

表1 グローバル人材の育成を目指した言語能力

知的活動（論理や思考）に関すること	コミュニケーションや感性・情緒に関すること
<ul style="list-style-type: none"> ・他者と共に思考し、新たな価値を生み出す力 ・意見と根拠、原因と結果などの関係を意識することができる力 ・分析する力 ・自分の考えを意見と根拠、原因と結果などの関係を明確に示して説明できる力 ・自らの考えを主張できる力 ・異文化の差を認識できる力 ・相手を説得できるような文章を書ける力 ・正解のない課題に取り組む力 ・クリティカルシンキングする力 ・主体的に物事を考える力 ・異文化の差を引き出し活用できる力 ・多様な背景を持つ相手に自分の考えを伝える力 ・日本人としての個性を確認できる力 ・日本固有の文化を背景にした思想を理解する力 ・日本文化、思想を受容する力 ・他者認識を通して自己の存在を思考する力 	<ul style="list-style-type: none"> ・国際社会で通用する広い視野で物事を捉える力 ・考えや前提条件の違いに特徴があることに気付く力 ・多様な価値観を共有できる力 ・集団を形成し、他者との協調、協働が図られる活動を行う力 ・より豊かな表現や論理的な表現を通して互いに交流する力 ・自分の考えを的確に伝え、相手の考えを理解し尊重する力 ・質問する力 ・論理的に思考し伝え合うことができる力 ・日本文化の知識を披露できる力 ・新しい価値を生み出せる想像力 ・多様な背景を持つ相手を認められる力 ・自分とは異なる他者を理解できる力 ・価値観の差異を乗り越える力 ・自分の考えや集団の考えを発展させることができる力 ・多様な意見があることに気付くことができる力 ・自分と相手との考えの違いを整理し、受け止めることができる力 ・状況を把握する力 ・ファシリテーションする力

2 調査研究

言語能力に関する意識と実態を把握するために、都立高等学校の普通科、ビジネスコミュニケーション科及び産業科の3校3科の生徒と教師を対象とし、質問紙法で調査を実施した。調査回答者数は、生徒99名（各学校、第2学年から抽出した1学級）、教師39名（教科を問わず全教師）である。生徒の調査では、「考える力が身に付くと感じる学習活動は何か」の問いに、「反論を想定して発言したり疑問点を質問したりしながら、課題に応じた話合いや討論などを行う『話すこと・聞くこと』の活動」と回答した生徒が約半数の44名いた。

また、教師の調査では、「話す・聞く活動を含めた学習活動が重要だと思うが、実際にはあまり取り組んでいない」と回答した割合は95%以上であった。いまだに高等学校では言語活動を取り上げて実践することが大切だと感じながらも教師主導の一斉授業を展開していることが多く、必ずしもコミュニケーションを円滑に図るための母語による総合的な言語能力の向上を目指す授業が十分に行われていない実態が改めて分かった。「話すこと・聞くこと」の言語活動を高等学校において、一層充実させ実践していくことが課題である。

3 開発研究

(1) 国語科カリキュラムの全体像

グローバル人材の育成を目指した言語能力の向上を図るための国語科カリキュラム開発にあたり、次の二つの要素を念頭においた。一つは高等学校学習指導要領（平成21年3月告示）での「現代文B」「古典B」「国語表現」の指導事項と合わせた内容のカリキュラムにすることであり、もう一つは国際バカロレアを想定した国語科カリキュラムにすることである。国際バカロレアに着目した理由は、東京都教育委員会が「都立高校改革推進計画 第一次実施計画」（平成24年）において、「海外大学への進学資格を取得可能とする都立高校初の国際バカロレア認定校」の設置を目指すとしており、グローバル人材の育成に直結していると考えたからである。

これらを核にして、基礎研究で分類した「グローバル人材の育成を目指した言語能力」を、効果的に高められるように発達段階に応じて配置した。次にそれぞれの力を育成するのに効果的な言語活動ができる教材を選定した。カリキュラムを実施する学年については第2、第3学年とした。第1学年で「国語総合」を学習し、その後発展的な科目として本カリキュラムを位置付けた。第2学年で4単位（世界文学を含む近現代文学作品3単位、日本古典文学作品1単位）、第3学年で3単位（世界文学を含む近現代文学作品2単位、日本古典文学作品1単位）学

習することを想定して構築した。これは、学習指導要領における国語科の卒業要件を満たしながら、国際バカロレアの課程修了認定も可能な時数の設定をした単位数である。国際バカロレアを実施した場合に、卒業と課程修了双方の認定を想定した方が良いと考えたからである。

また、このカリキュラムの特徴として、1作品全てを学習することがある。これは文学批評に関する見方、考え方を自ら学ぶことができるようにすることで、文学を個人的に味わい、生涯にわたって楽しむことができるようにするためでもある。次に、レポートや発表準備等の課題を家庭学習として必ず取り組ませることが挙げられる。これは、口頭、筆記の両面における表現力を高めるために様々な形式、状況での演習を授業で行うことを想定している。演習のために生徒が準備してきたことを共有する場として授業を位置付けるとともに、学校だけでなく生活全般において自ら学び考える姿勢を養うねらいがある。

(2) 国語科カリキュラムの開発

実際の国語科カリキュラムは「表2」(一部掲載)の形式で開発した。横軸には実際に科目を設定する際に必要となる6項目を挙げた。「学習指導要領指導事項との関連」の項目については、学習指導要領の各科目における「2内容」に記述された記号を明示した。これは本研究で設定した力が指導事項のどの部分に該当するのかを示すためである。どんな言語能力をどの教材で何時間かけて学習するのか、その教材の選定理由は何か等は明確にした。また、縦軸には第2、第3学年で学習する7単位(245単位時間)の計画を表した。例えば「表2」は、国語表現の指導事項「ウ」などと関連した「自らの考えや立脚点を主張できる力」等を第2学年後期の第71時から第82時で身に付けさせるために、『雪国』がふさわしい教材であると選定した理由を述べた部分を抜粋したものである。教材は私案として「グローバル人材の育成を目指した言語能力」の向上に資するものを15作品選定した。その際、幅広い時代、分野、形式、内容の作品を学習できるように心がけた。教材例としては、世界文学作品ではシェークスピア『ハムレット』、日本文学作品では川端康成『雪国』、日本古典文学作品では紫式部『源氏物語』などがある。検証授業では、言語能力の中から特に「質問する力」を取り上げ『ハムレット』等を使用し実践を行った。具体的な授業内容は次項で述べる。

表2 国語科カリキュラム(一部掲載)

学習指導要領指導事項との関連 現代文B 国語表現		グローバル人材の育成を目指した 言語能力 (学習目標)	時期 学年	のべ 時数	教材例 教材名 作者名	ジャンル ジャンル 時代	教材例選定の理由
イウカ	アウオ	<ul style="list-style-type: none"> 自らの考えや立脚点を主張できる力 「異文化の差」の存在を認識できる力 自分の思いや考えを伝えようとするともに、相手の思いや考えを理解し尊重しようとする力 	2後	第71時 5 第82時	『雪国』 川端康成	物語・小説 近代	<ul style="list-style-type: none"> 正解のない事柄に対して、自分の考えを叙述に即して根拠を明確に示しながら、相手に分かりやすく論理的に説明することに適した作品である。 ノーベル賞受賞作家の作品を学習することにより、日本文学ひいては日本文化を広く知り、例えば異文化交流を意識して日本文化を披露するなどの学習が考えられる。 「国境」の読み方一つで、議論ができる作品である。相手の話を適切に聞き取り、自分と相手の意見や考えの差異を認識し、協同して学び合うことができる教材である。

4 検証授業

(1) 検証授業の概要

開発した国語科カリキュラムの中から一部分を抽出し、都立高等学校の第2学年で4単位時間の検証授業を実施した。学習形態は、2学級3展開の少人数習熟度別としており、その中の「基礎クラス」で行った。本実践では、グローバル人材の育成を目指した言語能力の一つである「質問する力」に着目した。その理由は、他の単元にもすぐに活用できることと、どのような相手とも円滑なコミュニケーションを図り、理解し合える関係構築のための基礎が「質問する力」だと考えたからである。分からないことを適切に聞いたり根拠をもって答えたりするこ

とがグローバル人材の育成を目指した言語能力の基礎であると捉えた。さらに本単元では、相手の話を傾聴する姿勢の育成も図ることができる。傾聴することなく、本質に迫った質問や話題を広げるような示唆に富んだ質問はできない。したがって、検証授業では「話す力」とともに「聞く力」の育成も目指した。

そして学習活動として、「質問する力」を向上させるためにふさわしい言語活動を、生徒の実態に応じて各時間に配置した。複数の資料を比較して読む活動、ペアで意見を交換する学習、相互に評価をする活動、意見や考えを記述する活動、メモをとりながら整理して聞く活動、バズセッションなどを取り上げた。検証授業における学習目標、学習内容及び言語活動をまとめたものが、次の「表3」である。

表3 検証授業・「質問する力」の向上を図る学習（4単位時間扱い）

	学習目標	学習内容	言語活動
1	◇共通テーマを確認する。	・『ハムレット』、『羅生門』、『梓弓』（『伊勢物語』）のあらすじを読む。	○複数の資料を比較して読む。
2	◇共通テーマから派生させたトピックに対して質問を考案する。	・トピック1「雇用者、労働者の立場にたち、解決策を考える（ための質問を考案する）」に取り組む。	○ペアで意見を交換する。 ○意見や考えを記述する。 →発表原稿作成…課題
3	◇質問内容の吟味をして、まとめる。	・課題（考えや意見を記述した原稿）を発表し、聞く側は質問を考案する。 ・質問を分類し、それぞれの観点を確認する。	○立場を明確にして発表する。 ○メモをとりながら整理して聞く。
4	◇「なぜ」に着目して深まりのある質問を互いに吟味しながら考案する。	・トピック2「『梓弓』の登場人物の気持ち、状況等を捉える（ための質問を考案する）」に取り組む。	○ペアで意見を交換する。 ○バズセッションをする。 ○相互に評価をする。

(2) 検証授業の考察

検証授業において、生徒の変容を見るために行った学習活動は、短文を読み、適切な質問を考案するという内容である。検証授業前後の回答を比較してみると、相手を意識して内容を深めるような質問や、より具体的な内容を問う質問、新たな視点から問いかける質問などが見受けられた。授業後に行った評価において、「質問する力が付いた」と教師が判断できる生徒は、授業前の診断的評価と比較したところ増加した。本実践を通して目標を生徒に明確に伝え、ふさわしい言語活動を授業で適宜取り上げたことが生徒を変容させたと捉えられる。

また、事前事後の意識調査において、「質問する力」の学習を通して「相手の質問に根拠を明確にして答えることができる」と肯定的に答えた生徒が67名中、14名から28名へと2倍に増加した。質問を考案することで、質問に答えるための根拠の明確化ということについてもある程度意識付けができた。

第4 研究の成果

- ・ コミュニケーションを円滑に図るための母語による総合的な言語能力の向上を図る単元を集約したものとして、「グローバル人材の育成を目指した言語能力」を効果的・効率的に高められる国語科カリキュラムの開発ができた。
- ・ 言語能力の基礎である「質問する力」に着目し、適切な言語活動を取り上げることで、「グローバル人材の育成を目指した言語能力」の一端を身に付けさせることができた。

第5 今後の課題

- ・ 開発した国語科カリキュラムの有効性を、各単元の実践を通して実証していく。
- ・ 開発した国語科カリキュラムに対応する評価について、指導と評価の一体化が図れるように各単元に応じた評価方法の工夫をする。